

名大医学部学友時報

2017
9

目次

1. 第108回学友大会開催にあたって	後藤 秀実 (1)	9. 支部だより	岐阜支部総会 (10)
2. 准教授就任	大崎 雄樹 (2)	東三河支部総会 (10)	
3. 特任教授就任	小谷 友美 (3)	10. 前期学生生活報告	 (11)
4. 人事トピックス	藤田 一司 (4)	11. クラブ活動報告	ラグビー部 (13)
5. 新病院長に聞く	伊藤 恭彦 (5)	12. 名古屋支部総会のお知らせ	 (13)
6. 十医者十色	濱口 正彦 (6)	13. ミニ展示会	 (14)
7. 懐かしき日々	道成 (7)	14. 学友大会ご案内	 (15)
8. 医師倭人伝	清井 仁 (8)	15. ご寄稿のお願い	 (15)
	坂野 晴彦 (9)	16. 編集後記	 (16)

第108回 学友大会開催にあたって

大会委員長 ^{ごとう ひでみ} 後藤 秀実



ゲリラ豪雨が日本各地に災害をもたらした梅雨の時期も終わり、本格的な暑い夏を迎えようとしております。今日この頃ですが、学友会の会員の先生方におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。本年10月21日(土)に名古屋観光ホテルに於きまして第108回名古屋大学医学部学友大会を開催させていただきますので、ご挨拶を申し上げます。

名古屋大学医学部は150年という長い歴史と伝統を有しております。幸いにも私はその内の最近の30年を大学に在局し経験させていただきました。150年と言わず、この30年でも名古屋大学医学部が大きく変わりました事は、ご存知の事と思います。その一つに病棟や外来棟な

どの鶴舞地区の多くの建物が新しく建て変えられ、まさに新しい時を迎えようとしている事が挙げられます。また、内科医師の私から申しますと、旧第一、第二、第三内科のナンバー内科制から臓器別編成により6診療科に分かれました事も、大きな変革でありました。このように伝統は継続されながら、長い目で見ますと少しずつ変革され、新しい時代に受け入れられております。

その変革は名古屋大学のみでなく、日本の医学研究でも行われ、その結果誕生したのが日本医療研究開発機構であります。今年の学友大会の特別講演には、その日本医療研究開発機構理事の菱山 豊先生にお願いし、「日本医療研究開発機構のミッション」というタイトルでご講演を賜ることとなりました。本機構の目的が、医療の分野における基礎から実用化までの研究開発とその成果の円滑な実用化に向けての研究支援とされておりますので、本会員の先生方には非常に興味深いテーマと考えております。

本年の学友大会に多くの会員の先生方にご参加賜り、旧交を温められますとともに、本大会にて新しい交流が生まれ、名古屋大学医学部にとりまして意義深い会となりますことを期待しております。会員の皆様のご健康とご活躍を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

准教授就任

機能形態学講座 分子細胞学

おおさき ゆうき
大崎 雄樹

<略歴>

1999年3月31日 鳥取大学医学部生命科学科 卒業
2004年9月30日 鳥取大学大学院医学系研究科生命科学系専攻博士後期課程 終了
2004年10月1日 名古屋大学大学院医学系研究科21世紀COEプログラム 博士研究員
2007年4月1日 名古屋大学大学院医学系研究科機能形態学講座分子細胞学 助教
2010年4月1日 フィンランドヘルシンキ大学医学部解剖学講座 博士研究員
2012年4月1日 名古屋大学大学院医学系研究科機能形態学講座分子細胞学 助教
2014年7月1日 名古屋大学大学院医学系研究科機能形態学講座分子細胞学 講師
2017年6月1日 名古屋大学大学院医学系研究科機能形態学講座分子細胞学 准教授

<業績>

1. Ohsaki Y, Kawai T, Yoshikawa Y, Cheng J, Jokitalo E, Fujimoto T. PML isoform II plays a critical role in nuclear lipid droplet formation. **The Journal of Cell Biology** 212(1):29-38. (2016)
2. *Yamamura T, *Ohsaki Y, Suzuki M, Goto H, Fujimoto T (他7名). Inhibition of NPC1L1 by ezetimibe activates autophagy in human hepatocyte and reduces mutant alpha1-antitrypsin Z deposition. Inhibition of NPC1L1 by ezetimibe activates autophagy in human hepatocyte and reduces mutant alpha1-antitrypsin Z deposition. **Hepatology** 59(4):1591-1599. (2014)
*co-first author
3. Ohsaki Y, Cheng J, Suzuki M, Fujita A, Fujimoto T. Lipid droplets are arrested in the ER membrane by tight binding of lipidated apolipoprotein B-100. **Journal of Cell Science** 121(14):2415-2422. (2008)
4. Ohsaki Y, Cheng J, Fujita A, Tokumoto T, Fujimoto T. Cytoplasmic lipid droplets are sites of convergence of proteasomal and autophagic degradation of apolipoprotein B. **Molecular Biology of the Cell** 17(6):2674-2683. (2006)
5. Ohsaki Y, Sugimoto Y, Suzuki M, Ohno K, Ninomiya H (他5名). Cholesterol depletion facilitates ubiquitylation of NPC1 and its association with SKD1/Vps4. **Journal of Cell Science** 119(13):2643-2653. (2006)

学友会の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、平成29年6月1日付けで名古屋大学大学院医学系研究科機能形態学講座分子細胞学の准教授を拝命致しました。ここに謹んでご挨拶を申し上げます。

私は鳥取大学医学部生命科学科および同大学院博士課程において、大野耕作・元同大学脳神経小児科教授、二宮治明・現同大学保健学科教授のご指導のもと博士号(生命科学)を取得しました。平成16年より名古屋大学大学院医学系研究科機能形態学講座分子細胞学において藤本豊士教授のご指導のもと、博士研究員・助教・講

師を勤めさせていただきました。この間、研究室の方々を始め、名古屋大学および他機関の多くの方々にご助力を賜りましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。

研究面では、大学・大学院時代には全身の細胞にコレステロールが蓄積し進行性の神経細胞脱落を呈するニーマン・ピック病C型の病態解明に従事し、コレステロール等の輸送・代謝経路の分子基盤の解明に努めました。名古屋大学在任中、および平成22年から24年までのヘルシンキ大学医学部解剖学講座(Elina Ikonen研究室)在任中においては、トリグリセリド・コレステロールエステルの細胞内蓄積である脂肪滴について、その生理的意義と局在分子の機能解析に従事し、特に肝由来細胞では脂肪滴が蛋白質分解系の足場として機能すること、核内にも脂肪滴が存在し脂質代謝等に関与している可能性があること等を見いだしました。今後も細胞内脂質代謝機構とそれらの破綻が及ぼす各組織細胞機能への影響を、形態学、生化学等の手法をもとに解明して参りたいと考えております。

教育面では解剖学講座の一員として、主に医学科2年生の骨学・頭頸部解剖学・神経解剖学の実習を支援して参りました。コメディカル学科の出身ではありますが解剖学実習に初めて参加した際には大きな衝撃を受けました。しかしながら代謝異常疾患の細胞レベルでの研究を常に組織・個体と関連づけて考える上で、実際の人体構造・組織を学ぶ機会を頂いたことは大変貴重な経験となりました。多くの医学生にとって全身解剖学を含む人体構造の学習はその後の医師生活を通じても貴重な機会であり、今後もその系統的教育の向上に尽力たく存じます。また名古屋大学医学部の特色である医学生の将来的な基礎医学研究への門戸拡充にも、基礎医学セミナー等を通じて貢献したいと考えております。

私は医師の資格は持ちませんが、医学部内の研究室で育った生命科学者として、細胞生物学的研究を基盤としながら脂質代謝疾患の治療応用に繋がるような仕事を続け、基礎医学領域の発展に微力ながら貢献致したく存じます。今後も引き続き、ご指導を賜りますよう皆様何卒宜しくお願い申し上げます。

准教授就任

発育・加齢医学講座 産婦人科学

こたに ともみ
小谷 友美

<略歴>

1996年 3 月 名古屋大学医学部医学科卒業
1996年 4 月 名古屋第一赤十字病院勤務
1999年 4 月 名古屋大学医学部大学院医学系研究科産婦人科学 入学
2002年 3 月 同上 修了
2002年 4 月 名古屋大学医学部附属病院 産婦人科 医員
2002年11月 名古屋大学医学部附属病院 産婦人科 助手
2008年 4 月 名古屋大学医学部附属病院周産母子センター助教 (配置換)
2010年 8 月 名古屋大学医学部附属病院 産婦人科 講師
2017年 8 月 名古屋大学大学院医学系研究科 産婦人科学 准教授

<業績>

1. Ushida T, Kotani T, Tsuda H, Imai K, Nakano T et al. Molecular hydrogen ameliorates several characteristics of preeclampsia in the Reduced Uterine Perfusion Pressure (RUPP) rat model. Free Radic Biol Med. 2016;101:524-533.
2. Imai K, Kotani T, Tsuda H, Mano Y, Nakano T et al. Neuroprotective potential of molecular hydrogen against perinatal brain injury via suppression of activated microglia. Free Radic Biol Med. 2016;91:154-63.
3. Mano Y, Kotani T, Ito M, Nagai T, Ichinohashi Y et al. Maternal molecular hydrogen administration ameliorates rat fetal hippocampal damage caused by in utero ischemia-reperfusion. Free Radic Biol Med. 2014;69:324-30
4. Kotani T, Iwase A, Tsuda H, Mano Y, Yamamoto E et al. Altered expression of enzymes regulating the activity of endothelin-1 in the lower segment of the human amnion during labor. Biol Reprod. 2013;89(3):52.
5. Kotani T, Sumigama S, Hayakawa H, Mano Y, Tsuda H et al. Elevated levels of aldosterone in the amniotic fluid in two cases of congenital mesoblastic nephroma. Ultrasound Obstet Gynecol. 2010;36(2):256-8.

学友会の先生方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、平成 29 年 8 月 1 日付けで名古屋大学大学院医学系研究科総合医学専攻発育・加齢医学講座 産婦人科学分野の准教授を拝命しました。その重責に身の引き締まる思いがいたします。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成 8 年に卒業後、名古屋第一赤十字病院で諸先生方のご指導のもと研修を開始しました。妊産婦死亡率減少を目指した周産期母子医療センター事業の黎明期で、センター立ち上げの機運が高まっていた時期であり、悪性腫瘍領域でも動注化学療法などにいち早く取り組まれていました。大晦日の当直中、緊急手術時に切迫早産治療薬の副作用と考えられ心室細動を発症した妊婦や、劇症型 A 群溶連菌感染症で敗血症ショックに至った妊婦など数々貴重な臨床経験の機会を得ました。

勤務 3 年目の冬に、水谷名誉教授より大学院進学を薦めていただき、野村先生はじめ諸先生方にピペット操作などゼロからご指導を受けました。時には RI 室にもって胎盤酵素の転写領域解析に取り組みました。実験に没頭する時間は新鮮でしたが、同時に研究の厳しさも実感しました。進路に悩んだ時期もありましたが、「ホタルみたいにあっちの水が甘いかなんて言うてはいてはだめだ」と諭され、しばらくして吉川教授に産科領域の課題に臨床面および基礎研究で一貫して取り組む道を薦めていただき、板倉教授 (順天堂大) のご指導のもと産科を専門とすることとなりました。教員 3 年目の時期に、出産を契機に休職し、予想以上に大変で育休を延長し約 2 年半離職してしまいました。しかし、吉川教授や医局長だった井篁教授 (和歌山医大) が夫の転勤などご配慮いただいたことや同僚の先生から励ましの連絡をとり続けていただいたことなどもあり、復帰に踏み切ることができました。

その後、研究チームにも恵まれ、医学部および環境医学研究所の基礎研究室の諸先生方にもご指導いただきました。生体反応病理学豊國教授のご指導・ご協力のもと開始した、胎児の炎症・酸化ストレス障害に着目した研究では、本年 4 月の日本産科婦人科学会学術講演会シンポジウムで一定の成果を報告する機会を得ました。近年、胎内感染・炎症曝露 (MIA: maternal immune activation) が将来の神経精神疾患発症の環境因子となることが注目されております。もちろん遺伝的要因が重要ではありますが、産科医として胎内環境による疾患の priming を阻止することにより次世代の健康増進につなげられたらと考えております。

当院では、小児外科疾患中心に胎児重症例の受け入れを積極的に行っております。愛知県の妊産婦死亡率は全国平均よりやや上回るとされており、主な死因である産後出血に対する救急体制の整備、妊産婦自殺に対するメンタルサポート体制の整備なども課題と考えております。甚だ力不足とは存じますが、吉川教授及び諸先生方のご指導のもと新たな気持ちで取り組んでまいりたいと考えております。引き続き関連診療科の先生方のお力添えをいただければ幸いです。

研修先の名古屋第一赤十字病院・大学病院・中部ろうさい病院はじめ代務先の関連病院で臨床のご指導いただいた先生方、休職のブランクに悩んだ時期に支えていただいた産科チームの先生方、臨床現場の様々な局面で助けていただいた他診療科の先生方、これまでご指導いただきました諸先生方に、この場を借りて心より感謝申し上げます。今後とも、益々のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

特任教授就任

医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター

ふじた ひとし
藤田 一司

〈略歴〉

1985年3月 大阪大学大学院 理学研究科 修士課程終了
1985年4月 住友製薬株式会社
1988年4月 東京大学大学院 薬学研究科 国内留学
1993年2月 東京大学 薬学博士
2005年10月 大日本住友製薬株式会社
2010年7月 化学研究所長
2013年4月 知的財産部長
2016年4月 製薬協 知的財産委員会 委員長
2017年7月 名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター特任教授

〈業績〉

1. Yoshikazu Sugihara, Hitoshi Fujita, and Ichiro Murata, J. Chem. Soc., Chem. Commun., 1986, 1130-1131
2. Yoshikazu Sugihara, Reiko Hashimoto, Hitoshi Fujita, Noritake Abe, Hiromasa Yamamoto, Takashi Sugimura, and Ichiro Murata, J. Chem. Soc., Perkin Trans. 1, 1995, 2813-2815
3. Kiyoshi Tomioka, Hitoshi Fujita, and Kenji Koga, Tetrahedron Letters, 1989, 30, 851-854
4. Norio Fujiwara, Hitoshi Fujita, Kiyotaka Iwai, Ayumu Kurimoto, Shinobu Murata, and Hajime Kawakami, Bioorg. Med. Chem. Lett., 2000, 10, 1317-1320
5. Norio Fujiwara, Takashi Nakajima, Yutaka Ueda, Hitoshi Fujita, and Hajime Kawakami, Bioorg. Med. Chem. Lett., 2008, 16, 9804-9816

学友会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

2017年7月1日付で、名古屋大学医学部附属病院の先端医療・臨床研究支援センター特任教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は、学生時代に有機合成化学を専攻し、まったく未知なる有機化合物の創生に非常に興味を持ちました。この知識と技術を生かして人々の生命を守る医薬品合成に生かそうと、1985年、創立当初の住友製薬株式会社に入社、研究所 合成化学研究室に配属されました。入社当時は開発化合物であるアンスラサイクリン系抗癌剤であるSM-5887の全合成に携わりました。当時はアドリアシン等の類似薬剤が販売されていましたが、培養で製造されており、この複雑な分子構造を製品として全合成する製造法を確立することは至難の技のように思われました。しかし、3年の歳月と10人の合成化学者の知恵を持って、全22工程の全合成製造法が構築できました。この製品は臨床試験を経て、カルセドという製品名で上市され、患者さんのもとに届くことになり、非常に感銘を受けました。

その後約3年間、東京大学薬学研究科へ国内留学を命じられ、抗腫瘍性化合物の合成とメカニズムの研究で薬学博士を取得いたしました。大学での研究は企業での研究と違い、各個人に研究が任されるため、責任は重いも

のの、やりがいのある仕事でした。

企業に戻ってからも約22年間、一貫して創薬化学研究を継続し、重症感染症、免疫・アレルギー、糖尿病、精神神経と幅広い創薬に従事しました。ひとつの薬剤を創生する確率は探索合成の化合物数の約2～3万分の1といわれていますが、その困難な探索から非臨床試験の研究期間を何度も何度も繰り返し経験してきたことになります。途中、米国のベンチャー会社であるセプラコール社、ボストンバイオメディカル社を買収、日米で一体となって探索研究をする中で、同じ創薬研究でも文化が違えば、考え方も大きく異なるということも経験しました。

2013年からは知的財産部に異動、今までとはまったく違った環境での仕事はわくわくの連続でした。研究とは違い、日々変化していく速度が速く、すばやい対応が求められる仕事だったからです。

その縁もあって、2017年7月に名古屋大学医学部附属病院の先端医療・臨床研究支援センターのメンバーとして着任させていただきました。先端医療・臨床研究支援センターでは、先端、先進医療開発の中核として、さまざまな専門性の高い人材が活躍しています。その一人として採用していただいたことに、心より感謝いたしますとともに大変な責任も感じております。現在は、医学部及び附属病院の先生方の発明発掘と特許出願、特許庁対応、外国出願、維持管理といった知的財産全般とさらには、その知財を生かすために技術移転等の業務を学術研究・産学官連携推進本部の知財・技術移転グループとともに協力して行っています。また、文科省の「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」や厚労省の「臨床研究中核病院」においても、両プログラムがスムーズに進展するよう、知財において問題が出ないように管理対応しています。

元来、大学は知的財産の宝庫であり、大学の行う日々の活動のほとんどが新たな知的財産の創造であると考えていました。それをどのように権利化し保護し活用するのか、時には企業と同じビジネスの視点からの判断を迫られることがあります。研究者の先生方は、当然、研究に対する情熱と知識はすばらしいのですが、事業性という観点には慣れていらっしゃると思うことが多いと思います。この点をサポートし、名古屋大学から多くの新規発明を創生できるよう頑張りたいと思いますので、学友会の皆様におかれましては、ご指導ご鞭撻いただきますようよろしくお願い申し上げます。

人事トピックス

愛知医科大学 内科学講座（腎臓・リウマチ膠原病内科）教授
総合腎臓病センター長いとう やすひこ
伊藤 恭彦

〈西歴〉

- 1982年3月 日本医科大学卒業
1982年3月 厚生連愛北病院 研修医、内科勤務
1987年5月 名古屋大学第三内科 医員
1990年1月 中部労災病院腎臓内科副部長
1996年1月 オランダアムステルダム大学病理学教室留学
1998年4月 中部労災病院腎臓内科部長
2005年2月 名古屋大学大学院医学系研究科 腎不全治療システム学寄附講座准教授
2010年2月 名古屋大学大学院医学系研究科 腎不全総合治療学寄附講座教授
2017年5月 愛知医科大学内科学講座（腎臓・リウマチ膠原病内科）教授

〈業績〉

1. Ito Y, Mizuno M, Suzuki Y et al., Long-Term Effects of Spironolactone in Peritoneal Dialysis Patients. J Am Soc Nephrol 25: 1094-1102, 2014.
2. Kinashi H, Ito Y, Mizuno M et al., TGF- β 1 Promotes Lymphangiogenesis during Peritoneal Fibrosis. J Am Soc Nephrol 24: 1627-42, 2013.
3. Suzuki Y, Ito Y, Mizuno M et al., Transforming growth factor- β induces vascular endothelial growth factor-C expression leading to lymphangiogenesis in rat unilateral ureteral obstruction. Kidney Int; 81: 865-79, 2012.
4. Ito Y, R Goldschmeding, RJ Bende et al., Kinetics of Connective Tissue Growth Factor expression during experimental proliferative glomerulonephritis. J Am Soc Nephrol 12: 472-484, 2001.
5. Ito Y, J Aten, RJ Bende et al., Expression of connective tissue growth factor in human renal fibrosis. Kidney Int 53: 853-861, 1998.

この度、2017年5月1日付けにて愛知医科大学腎臓・リウマチ膠原病内科教授を拝命しました。この場をお借りして名古屋大学学友会の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は1982年に日本医科大学を卒業し、厚生連愛北病院に勤務した後、名古屋大学第3内科で腎臓病学の臨床、研究に励みました。この時、松尾清一先生（現名古屋大学総長）のご指導の下、ヒト腎生検組織における免疫組織学評価や腎炎惹起性の単クローン抗体を作成し腎炎発症機序を研究し、臨床医としての研究を行う意義を学びました。1996年より2年3か月間オランダアムステルダム大学に留学し腎臓病進展のメカニズム、特に成長因子の研究を行いPh.Dを取得しました。帰国後中部労災病院で腎臓内科部長を務め、腎臓病から膠原病まで広く診療を行いました。2005年に名古屋大学へ戻り慢性腎臓病から透析療法まで、特に腹膜透析の責任者として診療から研究まで行い若手医師も指導してきました。現在、日本透析医学会の腹膜透析ガイドラインの委員長を、国際腹膜透析学会（ISPD）council member、ガイ

ドライン委員を務め、2019年に名古屋で開催されますISPDアジア太平洋部会の会長を務めることになっていきます。

愛知医科大学腎臓・リウマチ膠原病内科学の起源は、前身である愛知医大第一内科に遡ります。第一内科は昭和47年に開講し、名古屋大学旧第三内科の出身の先生方が主なスタッフとなり沢木倭二先生が教授をお務めになりました。その後、加藤克己先生、各務伸一先生が歴代の教授をお務めになられ、平成15年に臓器別となり腎臓・膠原病内科初代教授に秋田大学より今井裕一先生が就任されました。私が当講座の2代目教授ということになります。現在、腎臓・リウマチ膠原病と幅広い診療を行い入院患者は平均30名程で在院日数は14日となっています。わが国で慢性透析療法を受けている患者総数は33万人であり、これは成人430名に対し1人に相当するcommon diseaseです。早期発見、早期治療、小児から成人、さらに高齢者へ至る腎疾患に対応する必要性や腎移植療法を含めた腎代替療法の充実などを図る必要性が高まり、2016年7月、総合的に腎臓病を診ることを主眼として「総合腎臓病センター」が設立されています。腎臓内科医のみでなく、小児腎臓医、腎移植外科医を擁し、いかなる患者さんにも対応できる体制が次第にできてきました。腎移植は、小林孝彰教授が中心となり年間30～40組の移植手術を実施しています。単なる血液浄化療法センターではなく、腎臓総合病センターとして患者一人ひとりのニーズに則した適切なかつ質の高い医療の提供をめざし行っております。リウマチ・膠原病も多彩な患者が紹介され、免疫抑制剤、生物学的製剤を用い積極的な治療を行っています。研究分野がやや出遅れている感じがありますが、今後伸ばしていきたいと考えております。名大腎臓内科丸山教授との共同研究も計画され大変楽しみにしております。

私個人も名古屋大学および関連施設の先生方、特に現春日井市民病院院長の渡邊有三先生には研修医時代から広く臨床を教えていただきました。今後、名古屋大学と様々な観点から連携、交流を深めさせていただければとお願いいたします。また、名古屋大学学友会の諸先生方との診療連携にも努めたいと考えておりますので、皆様にはご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

新病院長に聞く

中東遠総合医療センター 企業長・院長 **宮地 正彦**



中東遠総合医療センターは、平成25年5月1日に新病院として開院しました。500床の病床を持ち、以下の診療科を有しています。

診療部門

総合内科、糖尿病・内分泌内科、腎臓内科、血液内科、神経内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、外科、消化器外科、血管外科、乳腺外科、呼吸器外科（代務のみ）、人工透析外科、整形外科、リウマチ科、脳神経外科、小児科、産婦人科、泌尿器科、皮膚科、眼科、耳鼻いんこう科、放射線診断科、腫瘍放射線科、麻酔科、リハビリテーション科、歯科口腔外科、精神科（代務のみ）、病理診断科、臨床検査科、救急救命科

平成29年4月に新病院長に就任された宮地正彦先生にお話を伺いました。

Interview

——新病院長就任おめでとうございます。まずは今の率直なお気持ちを聞かせてください。

昨年11月に突然、縁もゆかりもなかったこの病院の院長就任の話を頂いた時は、青天の霹靂でした。前任の愛知医科大学消化器外科在職中はこのまま外科医で4年後に定年を迎えるつもりでしたので、管理職になることは想定外でした。残念ながら当院では、診療に割く時間が限られ、外科医として病院に貢献できていませんが、病院の方々に温かく迎えていただき、病院から見える大きな富士山から勇気をもらい、企業長兼院長として楽しく働かせていただいています。しかし当院の医療圏内に在住されている約48万人の方々の医療について、さらに1000人以上の職員とその家族の方々の生活についても責任を負うことを思うと、身が引き締まる思いです。

——病院の特徴を教えてください。

中東遠総合医療センターは、平成25年5月に全国で初めて、掛川市と袋井市の2つの市民病院が合併してきた公立病院です。袋井市民病院、掛川市民病院は浜松市と静岡市の間に位置し、名古屋や東京から遠いことから、医師不足、またマッチング希望者が少ないことから、十分な診療ができない科が出てきた結果、合併に至りました。この合併により500床にダウンサイズしましたが、PETやダビンチを有し、700～800床レベルの設備が揃っていること、病院施設が新しく綺麗であることから、マッチング希望者が今年度は2倍に激増しました。

救急救命センターを有し、救急医療では地域医療に大きく貢献しています。救急医が開院当初は6名いましたが、今年の4月には2名にまで減少してしまいました。しかし全科の医師で救急医療を支えようという決意を新たに、救急医療を支えた結果、救急車の搬送患者数、救急救命センターの受診者数はかえって増加しました。さらにうれしいことに当院を離れた救急医が非常勤医師としてサポートしてくれるようになり、以前より高度の救

急医療を行うことができるようになりました。

——今後の展望や抱負について聞かせて下さい。

当院に私が着任し、最初感じたのは、癌診療をさらに強化する必要があるということです。私は消化器外科医として癌診療に関わっているため、いずれはがん拠点病院の指定を得たいと考えています。そのために、今はない呼吸器外科部門を増設したいと考えています。ダビンチもあり、癌手術の精度をさらに上げていきます。また心臓外科部門も増設し、多くの治療を中東遠域内で完結できるようにしたいと考えています。

良質な医療を行うためには職員が身体的・精神的にも健康であることが重要です。全ての職種の方々が、忙しいですけれど、元気で、楽しく働くことのできる病院を作りたいと思います。

——卒後研修への取り組みについてお聞かせください。

全診療科において診療だけではなく、教育面においても迅速に強化しています。当院では初期研修と後期研修を合わせて5年をひとまとまりの研修期間と考えた研修プランを考えています。具体的には、初期研修する診療科での到達目標を明確にし、さらに救急医療においても経時的に到達目標を明らかにし、クリアできるように指導します。後期研修では週5日のうち1日は救急医療に従事してもらうことで救急医の専門医取得を目指し、残りの4日を専門科の研修に充てます。内科であれば、メインの診療科ではより高次の専門的な修練を行い、それに加えて、サブの診療科でも日常診療できるような、多岐にわたる研修を考えています。また緩和ケア研修、NST講習などを受け、いくつかの資格を習得してもらいます。「自分たちで医師を育成する」ことを目指した教育を大切にし、幅広く診る力を養うことで、地域医療の向上、地域包括ケアシステムの構築、さらには当院から開業する医師を輩出することなども地域医療に貢献していきたいと考えます。

——最後に、学生へのメッセージをお願いします。

選択性を狭めず、幅広い視野を持ち続けてほしいです。しかし、専門性を定めたら誰にも負けにくいくらい突き詰めていってください。学生のうちは、勉強以外にもやりたいことにはどんどん挑戦して欲しいです。部活動などを通して学生時代に構築した人間関係が、今になっても役に立っています。

（インタビュー：村松 佑亮、丹下 恵里花）

